

学位論文要約

本論文は全三章で構成され、三つの目的を有する。一つ目は、開発の再考に向けた諸問題の検討であり、二つ目は、ハンナ・アーレント（1906-1975）の政治哲学の射程を明らかにすることである。そして三つ目は、複雑に絡み合ったこの二つの問題について一つの解決の道筋を示すことで、「我々」のあり方について総合生存学に新たな観点を提示することである。

第一章では、まず経済成長や進歩といった概念に結びつけられた開発の理論的限界を指摘し、開発の意思決定をめぐる立場を検討することで、開発の語源〈des-velopper〉の考察から、開発を開示的行為として理解する方途を提示した（第一節）。開示はアーレントとハイデガーに共通する関心である。アーレントの開示は公的領域に関わる一方で、ハイデガーの開示は思索の中で現れる。現代技術が孕む全体的支配の脅威に対して、ハイデガーはその原初へと向かう思索を救済として提示した。しかしそのみから政治的含意を抽出するのは困難である（第二節）。アーレントは、そうしたハイデガーの技術をめぐる思索を批判的に継承しつつ、思考の政治的意義を展開し、西洋哲学の伝統の始原において、哲学の政治に対する敵意を観取する（第三節）。この哲学と政治の緊張関係の問題は近代においても未解決に留まる。そして権威の没落とともに伝統の拘束を離れた思考過程は共通感覚の喪失し、全体主義支配のイデオロギーを受容する論理へと結びついていく（第四節）。そこでアーレントは、政治への敵意を共有しない唯一の哲学者であるカントに、この問題を解決する示唆を見出す。

第二章では、『カント講義』に即して、特にアーレントによるカントの共通感覚の解釈を基点に、哲学と政治の緊張関係が解消される道程を明らかにした。アーレントは、プラトンを始原とする伝統的な哲学者のあり方とは対照的な位置付けをカントに与え、彼が十分長く生きていたら書いていたであろう政治哲学の導出へと向かう。そこで彼女は人間（man）、人々（men）、人類（mankind）という解釈上の視点を提示し、カントの政治哲学を解釈するには人々（men）の観点が基点となると論じる。（第一節）。先行研究は、ペイナーの『解釈試論』が提示した二分法的解釈に影響を受けてきた。そこでアーレントのテキストに即して諸々の対照概念の差異を明確にし、判断に思考と行為を媒介するはたらきを見出す。そしてそれは、『カント講義』第十講義以降のテキストを中心に共通感覚の議論を詳細に検討することで明らかにされる（第二節）。アーレントは、反省において他者の判断を考慮し、思考の言葉に伝達可能性を与えることに関わる共通感覚を、共同体感覚として捉え直す。さらに、この共同体感覚の働きによって拡大された心性は、カントにおいて人類の観念としての根源的契約に結び付く。この点において行為と判断は同一の基準を獲得し、それが世界市民としてのあり方を可能にすると論じた（第三節）。

第三章では、図式と範例に関する「テーブルの比喻」の解釈から、根源的契約を範例として提示しうることを示し、その実践的意義を、UNESCOの世界人文学会議とバングラデシュの農村開発との連関において論じた。まず、判断に要請される「比較のための第三項」としての図式と、範例について「テーブルの比喻」との連関を読み解くことで、形相的テーブルには専制国家、抽象的テーブルには近代社会、さらに範例的テーブルには公的領域ないし共和制が対応していることが示唆される。以上の考察を踏まえ、アーレントは範例としての根源的契約に実践的意義を見出していることを示した（第一節）。この観念から範例への転回は、人類の歴史から人々の判断への転回を可能にする。その含意は、国連機関が直面する正当性の危機の問題に対して、カントが『永遠平和のために』で論じた共和制への移行におけ

る国際連盟の役割へと立ち戻らせる。その理念を分有するユネスコ憲章を踏まえ、世界人文学会議の意義を検討することで、諸国の共和制への移行に UNESCO が重要な役割を有していることを示した (第二節)。アーレントは評議会制度の発展の先に共和制の評議会国家の可能性をも射程に捉えていた。そしてその一つの実現可能性は、バングラデシュの農村開発における評議会制度に見出される。以上の考察から、人間が公的領域に自らの存在を開示する行為の現存性にこそ、新たな開発が基づかなければならないことが示唆される (第三節)。

近代の萌芽とともに始まった経済成長としての開発は膨張を続けており、国境の限界を超え、今や地球の限界を超えようとしている。このような不安に対して、世界の現実の出来事を注視し、言葉を交わし、自らの共同体感覚に照らして判断していくことで、我々は行為者として自らを開示する空間を構成しうると本稿は論じた。新たな開発のあり方はこのような空間において開示するのであり、総合生存学は、その先触れとならなければならないのである。